

企画展『多様な埼玉の生きもの－秩父学自然編を実物で学ぶ－』

2009年10月10日（土）～2010年2月7日（日）

須田 大樹



ホンドオコジョ（イタチ科）

夏毛は尾の先が黒褐色で腹部が白、背中が褐色。冬毛は尾の先だけ黒くあとは真っ白になる。ネズミなどを食べる。秩父では大滝や両神などの尾根筋の乾燥した岩場などで目撃できる。



アオゲラ（キツツキ科）

緑色の体と頭部の赤い斑紋が特徴的なキツツキ。雌雄で協働し巣作りをおこなう。秩父では留鳥として平地から山地にかけて一年中みられる。繁殖期にはタラタラ…と木の幹をたたく。



キベリタテハ（タテハチョウ科）

赤紫色のピロード地に黄色い縁取りという、大変お洒落な色彩のタテハチョウ。幼虫は山地のダケカンバなどを食べ、夏の終わりに成虫になる。冬越しの頃には地味な枯葉色になる。

埼玉県内でも比較的自然度の高い秩父地域に着目し、低山から亜高山まで、気候、降水量、地形や地質などに応じて多様な動植物がくらしていることを紹介します。今回はさわれる剥製を多数展示しますので、動物の体の仕組みや毛並みの違いなど、ぜひ実際にさわって感じてみてください。

また、3月に刊行された「やさしいみんなの秩父学〔自然編〕」（当館監修、さきたま出版会）に掲載されている動植物の多くを実物で学ぶことができますので、秩父商工会議所で2月実施予定の“ちちぶ学検定上級編”受験者も必見の内容となっています。

■亜高山の動植物（標高1600m～）

中・古生代の古い堆積岩や火成岩などでできており、岩石が硬く土地の隆起速度が大きいことから、険しい尾根とV字谷が発達しています。シラビソやオオシラビソ、コメツガなどの常緑針葉樹林が広がり、中部山岳を中心に分布するホンドオコジョや、原生林でさえずるコマドリなどをみることができます。県内で最も自然度の高い地域です。

■山地・渓谷の動植物（標高800～1600m）

奥秩父山地の下部と外秩父山地や上武山地の上部には、ブナやイヌブナ、ミズナラやクリ、カバノキ類など様々な落葉広葉樹からなる林が発達します。たくさんの木の実や落ち葉によって、野生動物も豊富な地域です。渓流沿いにはシオジやサワグルミが生育し、水中にはイワナやヤマメのなかま、ナガレタゴガエルなどが暮らしています。

■低山の動植物（標高～800m）

秩父盆地は周囲を山地に囲まれたほぼ四角形の地形です。約1500万年前に海底で堆積した砂岩や泥岩などの地層（第三紀層）からできています。盆地内には第四紀の古い荒川に削られてできた河岸段丘がみられ、長尾根と呼ばれる尾田蒔丘陵や羊山丘陵は公園としても親しまれています。人との関係が深い、里山の身近な動植物をみることができます。